

2023/06/03
日本文化人類学会第57回全国大会@県立広島大学

戸外にあることの想像力

—日本における登山とキャンプ、および人類学

九州大学大学院比較社会文化研究院
古川 不可知
furukawa@scs.kyushu-u.ac.jp

1

本発表の目的

1. 日本における「アウトドア」活動の歴史および人類学とのつながりを概観する
2. 「戸外」とはどのような空間か、またそこでどのような共同性が生み出されるのか、登山とキャンプを比較しつつ考察する
3. 「戸外」において「自然」およびそこから逆照射される理念的な「ホーム」がどのように想像されているのか考察する

2

研究背景と調査概要

- ◆ 背景
 - 新型コロナウイルス流行を背景とするアウトドア観光への注目
 - ヒマラヤ山岳観光の代替調査
- ◆ 調査概要
 - 九州北部を中心に2020年夏ごろから
 - 月二回程度アウトドアグループへの参与観察
 - 各種養成課程への参加
 - ・ キャンプインストラクター資格取得(2020年11月)
 - ・ 登山ガイド(ステージ I)資格取得(2023年3月)

3

先行研究(一部)

- ◆ 登山
 - 探検史・登山史研究[e.g. 業師 2006]
 - 山岳観光/エコツーリズムの人類学[e.g. 古川 2020]
 - 歩くことの人類学[e.g. Ingold & Vergunst 2008]
- ◆ (娯楽としての)キャンプ
 - 英語圏におけるキャンプ研究の流行(60s-70s)と2000年代以降の再注目[Brooker and Joppe 2013]
 - 野外活動と教育[e.g. デューイ 1957]
 - 住まうことをめぐる人類学[e.g. Ingold 2000]
 - *Journal of Outdoor Recreation and Tourism*, 『キャンプ研究』

4

民族誌における登山とキャンプ

- ◆ 登山
 - 現地に根付いた営みとして記述されることはほぼない
 - 「近代」固有の事象としてのピークハントと、現地の当たり前としての山に入ること
- ↓ ↑
- ◆ 「キャンプ」
 - 様々な「仮の住まい」を包含する分析概念
 - 狩猟採集[e.g. Bird-David 2017]、遊牧民[e.g. 中野]、難民[e.g. 片]、軍事、スポーツ、etc.
 - ⇒登山：外形<目的、キャンプ：外形>目的

5

1. 日本のアウトドア観光、および人類学

6

近代登山とキャンプの起源

- ◆ 登山
 - 1786年：モンブラン初登頂
 - 19c：アルピニズムの非西洋圏への波及
→山に登ることそれ自体が目的に
- ◆ キャンプ
 - Campus(羅): 平らな場所・野营地
 - 1861年：米国における教育キャンプの開始
- 「野外」における「共同生活」というデューイの理念
 - 近年の「貧乏人の保養地」からの脱却

[堀田 1990]

[Brooker&Joppe 2013]

7

日本における登山

- 修験者による登拝
- 明治期のお抱え外国人によるアルピニズムの導入
 - ゴerlandによる「日本アルプス」の発見(1881)
 - 当初はエリートによる探検かつ娯楽
- 大正登山ブームから「行軍登山」へ

[布川 2015]

↓ ↓

- 1950年代後半の大衆化
- 定期的な流行 e.g.山ガール(2010年)

8

日本におけるキャンプ

- 20世紀初頭における教育キャンプの受容
 - ボーイスカウトやYMCAによる普及活動
- 戦前の心身鍛錬の場としてのキャンプ
 - ↓ ↓
- 戦後民主教育の場としてのキャンプ
- 定期的な流行 e.g. 90年代のキャンプブーム、「ソロキャン」(2015年ごろ)

[日本キャンプ協会 2019]

9

日本の人類学と登山・キャンプ

- ◆ 今西錦司と探検・登山
 - 「バイオニアワーク」と「野外 field」の重視
 - 戦後のマナスル遠征(1952-56) →登山ブームへ
 - 国際山岳年(2002)の特別顧問：梅棹忠夫
⇒人類学と大衆登山は探検から生まれた双子
- ◆ キャンプブームとの関わりは調べきれいてないですが、、、
- 探検には必ず付随するキャンプ

10

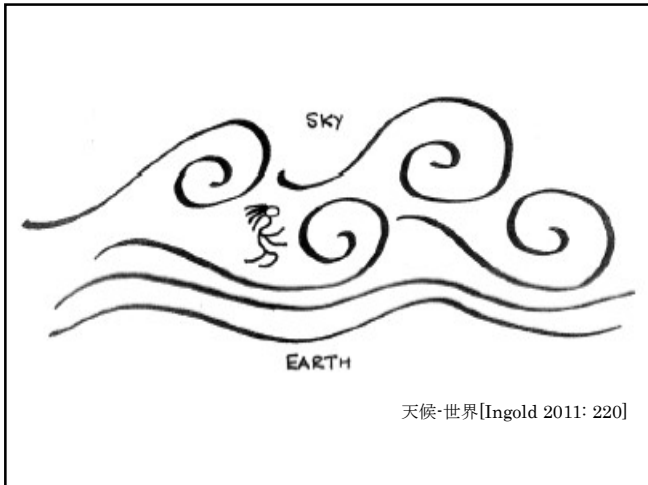
2. 「野外」をめぐって

野外という空間

- ◆ 危険な野外 outdoorという前提
 - (管理された)危険を消費するアドベンチャー・ツーリズム[Beedie & Hudson 2003]
 - 開かれた環境 = 自己と浸透しあう媒質の流れ[インゴルト 2017]
 - ↓ ↑
 - 自らの境界を確保するための移動[古川 2020]
 - 「天空と大地に挟まれた死すべき者としての人間」「住まうことは建てること」[ハイデッガー 2008]
- * 野外fieldとのニュアンスの違いは保留

11

12

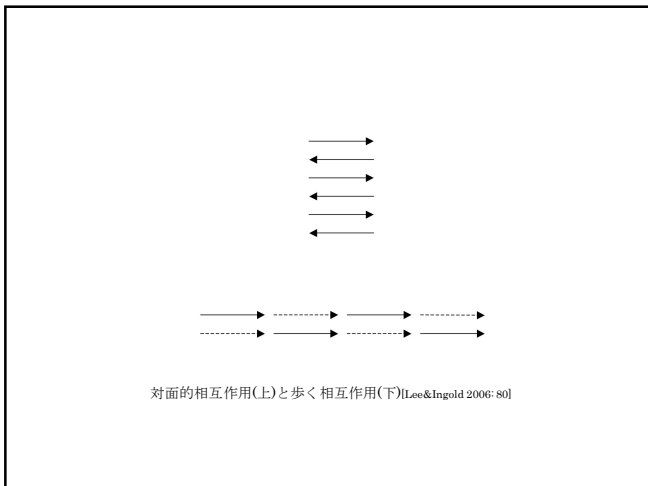


13

対面すること／ともに歩くこと

- リーとインゴルドによる対比 [Lee&Ingold 2006]
- ◆ 対面すること
 - 友好的ではなく対立的
 - 相手の目は見ても、相手が見ているものは見ない
- ↑ ↓
- ◆ 同じ方向に歩くこと
 - 同じ向きの移動が生む仲間意識 [cf. ギャツ 1987]
 - 人間は社会的だからともに歩くだけではなく、ともに歩くから社会的 [Lee&Ingold 2006]
 - リズムとパースペクティブを共有することで生じる間主観的な世界 [cf. 土井 2015]

14



15

モノの配置と時空間の分節

- ◆ 対面的なキャンプ
 - 定石としてはテント入口を風下 ⇔ 仲間内でテントの入り口を向け合う無意識のやり方
 - モノで空間的に分節されるキャンプの共同性 [cf. 左地 2017]
- ↓ ↑
- ◆ 同じ方向を向く登山
 - 山道によって一列で同じ方向へ
 - 歩調によって時間的に分節される登山の共同性 [cf. 吉川 2020]

16

戸外における「自然」と「ホーム」

19

「自然」をめぐって

- 「(虫に刺されて)山って自然なんですね！」 (30代女性・初心者)
- 「(山に登るのは)自然に癒されたいなと思って」「自然って何?」「人の手が入ってないこと」「でも杉は人が植えたものですよ」「じゃあ自然じゃないですね！」 (30代女性・初心者)
- 「日本の自然は人の手が入らないと成立しない」 (日本人ガイド) ⇔ 「山に人間の痕跡を残してはならない」 (ヒマラヤの米国人ガイド)
 - ⇒ 「人間と自然のシンビオシス」からなる日本の「半自然」 [今西 2014: 160]
 - ⇒ (少なくとも山岳観光の文脈では)諸物の配置のなかに立ち現れる自然 [吉川 2021]

20

戸外から想像される理想的なホーム

- ◆ ホームの延長としてのキャンプ
 - 「それ家でやった方がいいんじゃないって人もよくいる」
 - 「キャンプは絆を深めるってイメージ。あくまでも仲間が先にあって、たまたまその活動のひとつ、みたいな」
- ◆ ホームとは切り離された空間としての登山
 - 「山は途中で帰れない(から望ましい)」
 - 「山登りは景色が変わっていくから良い」
- ◆ 戸外から見た理想的なホーム
 - 「(転んで擦り傷を作り)外だから仕方ない」
 - 「(ランブに虫が寄ってきて)アウトドアって感じがあります」
 - ⇒ 戸外から逆照射される無菌室的なホーム像

21

理想的なホーム

○ 戸外



22

では今西は戸外から何を想像したのか？

- ◆ 「文明国」日本？
 - 「エクスペディションというのは.....文明人の生活圏をのりこえたところに、その活動の舞台が予想されねばならない。.....文明人が生活できるような設備のないところへ行って、そこで文明人の生活様式をくずさないで生活する、ということだと思えばよい」 [今西 1974: 141]
 - 「蒙古人にあたらしい自然の見方を教えることが必要」 [今西 2014: 93]。『指導民族』の自負 [本多 2012]
 - 「(気候の良い)高原でもあったら、そこを大いに開拓すべきであると思う」 [今西 1974: 447]
- ◆ 戸外を通して人類学の営みを問い直す
 - 「当たり前」を疑うと言ったときの「当たり前」は、戸外から想像された理想的なホームの姿かも

23

結論

24

結論

- ◆ 登山・キャンプ・人類学
 - いずれも探検の落とし子
- ◆ 戸外という空間と実践
 - 危険な戸外
 - 対面的で静的なキャンプ⇔同方向的で動的な登山
- ◆ 戸外における「自然」とホーム
 - 立ち現れる「自然」
 - ホームの延長としてのキャンプ⇔ホームから離れた登山
- ◆ 「戸外」への着目は人類学そのものを考えること

25

ご清聴ありがとうございました



26